『週刊ポスト』2020.2.10(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第108回 自動車のエンジン音に後押しされた「恋愛」

先月公開された米国映画『フォードVSフェラーリ』は、昭和39年から41年（1964～66）にわたる「ル・マン24時間レース」の実話を基にした自動車メーカー同士の争いを題材にしたものですが、お気に入りのマット・デイモンとクリスチャン・ベールの初共演ということで、公開週に観に行きました。

時代は私の中学生時代と重なり、昭和40年当時、完成間もない五反田ボウリングセンター内にあったモデルカー用サーキット場での同級生との会話を思い出し、グラハム・ヒルやジャッキー・スチュワートといった当時の人気レーサーの名前が懐かしく響きました。

中学2年の正月、昭和41年1月1日付で発売されたシングル盤があります。西郷輝彦の『恋のGT』です（片面『西銀座五番街』）。GTとは、ジェームズ・ボンドの愛車、アストンマーチンのようにレース専用車ではないけれど高性能を誇る車種のことで、GT車に乗って自動車レースに出走中、彼女の顔がちらつきながらも速度を上げて「次のカーブでライバルを抜いてやる、恋もレースも体当たりだ」といったレーサーの気持ちを歌っています（詞曲共・米山正夫）。

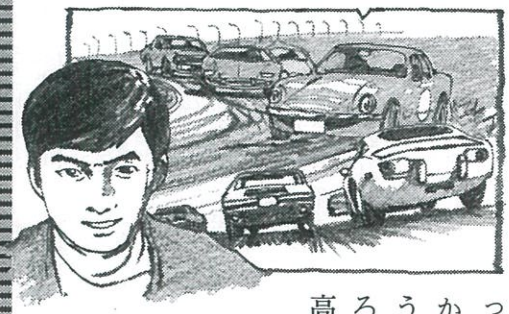
4輪ではありませんが、同時期には美樹克彦のバイクものリズム歌謡の傑作、『回転禁止の青春さ』（詞・星野哲郎）と『赤いヘルメット』が続いて発売されています。『赤い～』ではオートバイの排気音が「バーバーバー」と歌われ、黒い革ジャンを着て歌う姿に、中学生の私は同級生と一緒に見入っていたものでした。

西郷の『恋のGT』には、効果音として車のエンジン音が挿入されていましたが、その4か月ほど前の昭和39年9月に発売された橋幸夫の『ゼッケンNo.1スタートだ』こそが、こうした和製ホットロッド風リズム歌謡の嚆矢でしょう。レコード全編に流れるエンジンの轟音は、今でも胸の中で鳴り響いています。

爆音入りのレーサーものとしては、翌10月に発売された平尾昌章の『スピード野郎』も歌詞が数え歌になっていて楽しめます（詞・谷川俊太郎）。『恋のGT』同様、レース中にローラという女性のことを思い浮かべながら「勝利したら、お前は何をくれるんだ」とキッス以上のものを求める男心を歌っています。

昭和39年、東京五輪開幕直前、10月に新幹線が東京と大阪を超特急で結び、9月には海外からの選手や観客が到着する羽田と都心間にモノレールが完成、そして一足早い8月には羽田と都心を結ぶ首都高速道路が開通しています。東名高速道路の工事も着々と進む中、高速化時代を背景に歌の世界でも若者向けに高速道路をテーマにした歌が誕生します。

東京五輪の翌年、昭和40年2月に橋幸夫がリリースした『恋のインターチェンジ』は、直木賞作家であり、のちに実業家としても名が知られることになる邱永漢による作詞で、「まっすぐ行こうか、曲がろうか、それともこのまま戻ろうか　ここが思案のしどころよ」という、恋の進行と高速道路の走行を重ねた歌詞にはすでにリズムが内包されていました。中学生だった私は、この歌で「インターチェンジ」という外来語を知りました。



ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的『昭和大衆歌謡考』』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中